

## 寺院調査プロジェクト「都市寺院調査」

### 「福岡市寺院調査」

# 大都市における本宗寺院の現状と 新たな開教布教の可能性をさぐる

——福岡市および周辺地域  
(中間報告 アンケートの回答を中心に) ——

### はじめに

過疎地の寺院実態調査に引き続き、大都市での本宗寺院の現状と、新たな開教布教の可能性に関する調査を継続している。そこでは、

- A. 大都市における本宗寺院の現状を寺院の側がどう認識しているか。ことに檀信徒との関係、墓地、葬儀の現状と問題点を中心に。
- B. 大都市の一般的な宗教状況を調査、整理して新たな開教、布教の方策の資料とする。

この二点を軸にして、1回目に札幌市を調査、報告（「現代宗教研究」第29・30号所収）した。2回目として福岡市を対象地に選定、当該宗務所のご協力を得て、平成8年中に3回の現地調査を実施した。このことで札幌市との比較分析が可能となり、興味深い結果を得ることができた。本計画では、最低3カ所の調査地による比較分析を行ない、都市開教の方策についての指針を提示する予定である。

福岡市を調査対象にした理由は以下の通りである。

- ①九州地区を代表する政令指定都市であり、同じ政令指定都市の北九州より人口増加率が高い。

(1994年の対前年比 0.5%増加…『1995年民力朝日新聞社編』より)

- ②市内の本宗寺院24カ寺(教会、結社を含む)のうち17カ寺が東区、博多区、中央区に集中しており(平成6年度版寺院名簿より抽出)、大都市における本宗寺院の現状を調査する上で適地といえる。また、この寺院数は札幌市の23カ寺に近い数で、比較する上でも好都合である。

尚、今回の調査では地元教師の意見もあり、調査対象寺院を福岡都市圏に含まれる周辺地域の一部を加え38カ寺とした。

- ③修法師の全教師に占める割合が50%(平成元年データ)と全国でも上位にランクされている。
- ④札幌市は歴史が新しく、開放性に富んだ個人主義的傾向の強い土地柄なのに対して、福岡市は一般に独自の文化が残り、地縁・血縁の強い土地柄といわれ、好対照をなしている。このことから、福岡市の伝統的価値観の強い土地柄にあって、既成教団としての本宗の現状と新宗教の受け入れられ方の違いなど、札幌市との比較は興味深いものがある。

今回は定量的にとらえて数字処理による集計、分析が可能な「本宗寺院へのアンケート結果」を報告する。これは中間報告であって、行政・霊園・葬儀社・他教団等へのインタビューによる定性的な資料は現在まとめ作業中であり、また紙数の都合もあり次号の報告とする。

## I 調査経過

1. 予備調査 平成8年3月31日～4月2日

福岡県宗務所、日蓮聖人銅像護持教会、福岡市役所、  
西日本新聞社、民営霊園2カ所、葬儀社2カ所

2. 第1次調査 平成8年5月13日～14日  
福岡市役所、地区参事寺院、公営霊園1カ所、仏所護念会、  
立正佼成会、金光教、天理教、カトリック教団
3. 第2次調査 平成8年6月10日～12日  
福岡市及び周辺の本宗寺院38カ寺訪問アンケート調査
4. アンケート内容  
※次頁参照

## Ⅱ アンケート集計結果の分析とまとめ

- ※調査項目は多岐に亘るが、ここでは前回実施された札幌市の調査結果との比較分析で特徴的な項目についてのみ検討した。
- ※文中の全国値は、宗勢調査（平成4年度版）による。
- ※各項目の後ろの数字はアンケートの質問番号を示す。

### 1. 住職の出身 [I-(1)-c]

この項目は、住職が「在家出身」か「寺院出身」かを問うものであるが、福岡寺院においては「寺院出身」が76%という高い数値を示している。

札幌寺院の52%、全国値の61%と比較するならば、かなり高い数値である。また全国値の中で群を抜いて高い比率を示すのは、東京の75%であるが、それとほぼ同じ値がでている事は興味深い。

また「寺院出身」と答えた中で、更に「現在の寺院出身」か、「他の寺院出身」かを尋ねると、「他の寺院」の27%に対し、「現在の寺院」が49%という高い数値を示している。この点、札幌寺院では「他の寺院出身」が「現在の寺院出身」を上回っており、福岡と札幌では逆転していることがわかる。

このように福岡寺院では「在家出身者」よりも「寺院出身者」が多く、それも「現在の寺院出身者」が多いのが特徴といえる。

### 2. 住職の修行歴 [I-(1)-e]

## 都市寺院調査アンケート

日蓮宗現代宗教研究所

★このアンケートは現宗研寺院調査プロジェクトの調査・研究の目的のために使用するもので宗務院、宗務所など、他の機関に一切公表することはありません。また、宗務院の財政調査の資料となることもありません。

★皆様からいただいたアンケートは、貴重なデータとして慎重に取り扱わせていただきますので、個人的には一切ご迷惑をおかけすることはありません。忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

★選択事項の場合には、該当する番号に○をお付け下さい。

### 1 お寺の状況とあなたのことについてお答え下さい。

#### (1) 住職の経歴

- a、年 齢 (満 歳)
- b、住職歴 ( 年)
- c、出 身  
1、現在の寺院            2、他の寺院            3、在家
- d、出身地  
1、福岡市内            2、福岡市以外の県内            3、県外
- e、修行歴  
1、加行所 ( 回)            2、布教院 ( 回)  
3、布教研修所            4、声明講習会
- f、最終学歴 ( )
- g、兼業の有無  
1、有            2、無

#### (2) 寺院の状況

- a、寺院の創立年 ( 年 ・ 不明 )
- b、移転の有無  
1、有            2、無
- c、後継者の有無  
1、有            2、無
- d、寺院の主な収入源として多い順に3つ番号を入れて下さい。  
( ) 自坊の月回向  
( ) 自坊の葬儀、法事  
( ) 自坊の祈禱  
( ) 自坊の年中行事  
( ) 自坊の収益事業  
( ) 兼業する職業  
( ) 他寺の法務  
( ) その他 ( )

(3) 檀信徒の状況

- a、檀家数 (約 軒)
- b、① 信者数 (約 人)  
② 主な年齢層  
1、20歳代 2、30歳代 3、40歳代  
4、50歳代 5、60歳代 6、70歳代 7、80歳代以上
- ③ 主な性別  
1、男 2、女 3、どちらともいえない
- c、檀信徒の増減  
1、増加傾向 2、減少傾向 3、変化なし
- d、最も多い入檀、入信の理由

{

}

II 布教の現状についてお答え下さい。

- (1) 月回向の状況
- a、月回向の有無  
1、有 2、無
- b、1ヶ月あたりの月回向の軒数 (約 軒)
- c、1軒あたりの所要時間 (約 分)
- (2) お寺の行事に参加される檀信徒の割合はどんな状況ですか。
- a、祈禱会〔星祭り、守護神祭など〕(約 割)
- b、施餓鬼会 (約 割) c、彼岸会 (約 割)
- d、お会式 (約 割) e、信行会 (約 割)
- (3) 現在もっとも力を入れている布教方法は何ですか(力を入れている順に3つお書き下さい)。
- 1、( )
- 2、( )
- 3、( )
- (4) 福岡市の人口に対する宗門寺院の割合をどう思いますか
- 1、多い 2、適当 3、少ない 4、わからない
- (5) 今後有効だと思う布教方法は何かとお考えですか。

{

}

Ⅲ 葬儀、墓地（納骨堂）の状況についてお答え下さい。

- (1) 主な葬儀式場はどこが多いですか（複数可）。  
1、自宅                      2、寺院（寺院の会館を含む）                      3、貸斎場  
4、集会場                      5、その他（                      )
- (2) 葬儀の際の平均的な役僧の人数  
1、0人                      2、1人                      3、2人                      4、3人  
5、4人                      6、5人                      7、6人以上
- (3) 法号料または、それに類する名目で山納金がありますか。  
1、有                      2、無
- (4) 1回あたりの葬儀の布施収入（役僧法礼など一切を含む）の平均額はいくらぐらいですか。  
(約                      万円)
- (5) 葬儀社を通して、檀家以外の葬儀を依頼されることは年間どのくらいありますか。  
(約                      回)
- (6) 総檀家数の何割ぐらいが、お寺の境内墓地（納骨堂を含む）を利用していますか。  
(約                      割)

Ⅳ 寺院運営に関する問題の状況についてご意見をお聞かせ下さい。

- (1) ①子供数の減少で墓の後継ぎがないという問題が言われていますが、そのような傾向は現われていますか。  
1、ある                      2、ない
- ②「1、ある」と答えられた方は、寺院としてどう対応すべきだとお考えですか。  
1、すでに具体化している方は、その内容をお聞かせ下さい。

{

}

2、現在考えている方は、その内容をお聞かせ下さい。

{

}

3、何も考えていない。

- (2) 仏壇内に、他の信仰の物（新宗教の総戒名、お札など）を発見した場合、どのように対応しますか。  
1、黙っている                      2、一応説明して外させるようにする  
3、絶対に外させる                      4、その他（                      )

(3) ①今後福岡市で日蓮宗は寺院数を増やしたり、檀信徒数を増やしたりすることができるでしょうか。

- 1、可能性は十分ある      2、やりようによっては可能  
3、不可能

②「1、2」を選ばれた方、その方法はどのような事が考えられますか。

{ }

(4) 今後、現状の檀家制度が維持されていくとお考えになりますか。

- 1、現状で心配ない  
2、僧侶が努力して檀家制度を守るべきだ  
3、会員制にするなど何か新しい形を考えていく必要がある。  
4、不安はあるがどうしたらいいか解らない。  
5、その他 ( )

(5) 一般に若い人がお寺に来ることが少ない状況ですが、あなたのお寺ではそのために何かなさっていますか、あるいは考えていますか、お聞かせ下さい。

{ }

(6) 今後の寺院運営の悩みと問題点をお聞かせ下さい。

{ }

(7) 今後の宗門、ことに若い僧への期待、提言をお聞かせ下さい。

{ }

ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

福岡の場合、加行所の比率が布教院、布教研修所、声明講習会等に比較して高い数値を示している。

札幌の場合も加行所の比率が高い傾向にあるのは同じであるが、札幌の場合には「通夜説教は当然すべきもの」という習慣のためか、次いで布教院の経験者の比率が高いのが特徴的である。

一方、福岡の場合には加行所以外の修行歴の比率は少ない。この結果から福岡の場合には、もっぱら修法布教に比重がかけられていることがわかる。

### 3. 寺院後継者の有無 [I-(2)-c]

福岡の場合、後継者は84%とかなり高い数値を示している。これは全国値、札幌寺院共に65%であることを考えるとその高さがよくわかる。これは、寺院の経済的安定性に起因することが大であると推測される。

### 4. 寺院の主な収入源 [I-(2)-d]

この質問は、上位3項目について「点数制」と「比率」の二面から検討した。すると札幌寺院は、月回向が中心であり、年中行事は祈禱、葬儀・法事と続くが、福岡寺院は葬儀・法事が中心であり、年中行事、月回向と続いている。

この結果はきわめて明瞭であり、「月回向中心の札幌寺院」に対し、「葬儀・法事中心の福岡寺院」ということができる。

### 5. 檀信徒の主な年齢層 [I-(3)-b-②]

札幌、福岡いずれも40代から70代に互っているが、その違いをみると、札幌の場合は50代を中心に40代から60代の幅があるのに対し、福岡の場合には60代を中心に50代から70代の幅がある。

つまり、60代が中心の福岡に対し、50代が中心の札幌という結果であり、札幌の方が若干年齢層が若いといえる。

### 6. 檀信徒の増減 [I-(3)-c]

札幌の場合は、増加傾向、減少傾向共に高い数値を示しており、人口移動の激しさを物語っている。

しかし一方、福岡の場合には「変化なし」の数値が高い。これを具体的な数値



で見ると、札幌が26%、全国値が30~40%であるのに対し、福岡では42%である。

このことは、福岡の定住比率の高さと共に、寺檀関係の安定性を示すものといえよう。

#### 7. 月回向の有無 [Ⅱ-(1)-a]

札幌の場合、96%が「月回向有り」と答え、かなりの高比率を示しているが、福岡では63%という結果であった。

この項目についての全国値は無く、比較はできないが、これは各地域の諸事情、諸特性によって異なるものであるため、この数値の意味付けは難しい。

#### 8. 主な葬儀式場 [Ⅲ-(3)]

札幌の場合、その地域特性により貸斎場あるいは集会場が90%を占め、自宅で行うことは皆無であった。

一方、福岡では貸斎場が5割(47%)、次いで自宅が3割(34%)と続いており、各地域の特性あるいは時代の流れを見ることができる。

#### 9. 法号料の山納金の有無 [Ⅲ-(3)]

札幌の場合、65%が「有り」と答えているが、福岡では26%に過ぎず、むしろ福岡では58%が「無し」と答えている。

このように福岡と札幌では、まったく正反対の数値になっていることが特徴的であるといえよう。

#### 10. 寺院・檀家数増加の可能性 [Ⅳ-(3)-①]

札幌の場合、83%が増加の可能性をあげている(「可能性十分39%」、「やりようによっては44%」)が、福岡の場合、増加の可能性をあげているのは67%(「可能性十分24%」、「やりようによっては43%」)どまりであった。

また札幌では、「不可能」との回答は0%だが、福岡では14%となっている。

この項目においては、札幌と福岡でかなり異なった数値を示している。そこで更に福岡寺院を市内寺院と市外寺院に分類して比較検討した。

すると、市内寺院では増加の可能性をあげているのは54%だが、市外寺院においては86%と高い数値を示している。特に市内寺院では「不可能」との回答が2

割もあるが、一方、市外寺院では「不可能」との回答は無く、むしろ「やりようによっては」という回答が8割と高い数値を示しており、今後のやり方しだいで期待が持てそうである。

この設問は、寺院の置かれた環境によって回答がはっきり異なっている。地域と数値から考えると、たとえば新興住宅地や新しい団地などでは十分な可能性をうかがうことができる。しかし、宗門あるいは地域での支援無くしては困難なことである。

### まとめ

福岡市では住職の寺院出身者が多く、今後も後継者の不安が少ないなど、寺院住職の世襲化が定着していることがわかる。札幌市と比較して、その寺院運営は月回向が少なく、葬儀・法事による収入が中心を占め、法号料がないなど檀家の定着率が高い安定した状況にある。また、1カ寺当たりの檀家数も多い方で、自宅葬が主、檀信徒の平均年齢が高めといった傾向からも、地縁社会が色濃く残り、これを基盤に伝統的な寺檀関係が強く存続しているといえる。

こうした伝統的な寺檀関係の存続と安定した寺院運営、住職の世襲化といったパターンに現在のところ不安材料は見つからない。しかし一方では、大きく変化する時代への対応にスムーズかという疑念も残る。教線拡張のための新たな都市開教の実践は、一般に宗教浮動人口と呼ばれる宗教的に未組織な人達へのアプローチの問題といえる。この人達が我々既成教団をどう見、何を期待しているのか、客観的な分析と厳しい内部検証が必要ではないか。これに対する宗門寺院の意見は今回報告のオープンアンサーに示されている。また、行政・葬儀社・霊園・他教団などの声は次号に報告し全体のまとめをする予定である。

### Ⅲ アンケート集計結果 一覧表

※表中の市内市外の区分けは行政区分による

※寺院数 福岡市38カ寺（内 代務1カ寺） 札幌市23カ寺

I-(1)-a 年齢

	福 岡		札幌%	全国%
	人	%		
20歳代	0	0	0	2.0
30歳代	3	8	4	9.1
40歳代	8	22	44	21.9
50歳代	8	22	22	20.2
60歳代	6	16	17	23.1
70歳代	10	27	13	14.3
80歳代	1	3	0	4.8
90歳以上	0	0	0	0.6
不 明	0	3	0	4.0
計	37	101	100	100.0

I-(1)-b 住職歴

	福 岡		札幌%	全国%
	人	%		
5年以下	5	14	30	13.8
6～10年	8	22	13	13.0
11～20年	10	27	17	22.5
21～30年	5	14	30	17.3
31～40年	6	16	4	14.0
41年以上	2	5	4	14.9
不 明	1	3	0	4.5
計	37	101	98	100.0

I-(1)-c 出身

	福 岡		札幌%	全国%
	人	%		
現在の寺院	18	49	22	61.3
他の寺院	10	27	30	
在 家	9	24	48	33.9
不 明	0	0	0	4.8
計	37	100	100	100.0

I-(1)-d 出身地

	福 岡		札幌%
	人	%	
市 内	15	41	35
県内（道内）	15	41	52
県外（道外）	7	19	13
計	37	101	100

I-(1)-e 修行歴 （複数回答）

	福 岡		札幌%
	人	%	
加 行 所	26	55	65
布 教 院	6	13	52
布教研修所	2	4	9
声明講習会	2	4	30
な し	3	6	4
そ の 他	1	2	0
不 明	7	15	0

（回答者数 37人 23人）

I-(1)-f 最終学歴

	福 岡		札幌%
	人	%	
立正大学（大学院）	22	59	61
他 大 学	2	5	4
身延山短期大学	2	5	13
高 等 学 校	1	3	13
高 等 小 学 校	1	3	9
そ の 他	3	8	0
不 明	6	16	0
計	37	99	100

I-(1)-g 兼業の有無

	福 岡		札幌%	全国%
	寺	%		
有	1	3	0	14.8
無	34	89	100	79.9
不 明	3	8	0	5.3
計	38	100	100	100.0

I-(2)-a 創立年代

	福 岡		札幌%
	寺	%	
明治以前	12	32	4
明 治	7	18	17
大 正	3	8	17
昭 和	13	34	61
平 成	1	3	0
不 明	2	5	0
計	38	100	99

I-(2)-a 創立年代 (市内外別)

	寺		%	
	市内	市外	市内	市外
明治以前	11	1	46	7
明 治	3	4	13	29
大 正	1	2	4	14
昭 和	6	7	25	50
平 成	1	0	4	0
不 明	2	0	8	0
計	24	14	100	100

I-(2)-b 移転の有無

	福 岡		札幌%
	寺	%	
有	11	29	35
無	27	71	61
不 明	0	0	4
計	38	100	100

I-(2)-c 後継者の有無

	福 岡		札幌%	全国%
	寺	%		
有	32	84	65	65.4
無	5	13	30	31.1
不 明	1	3	4	3.4
計	38	100	99	100

I-(2)-d 主な収入源ベスト3

	福 岡		札 幌	
	点	%	点	%
月 回 向	29	14	51	38
年 中 行 事	48	23	36	26
葬 儀 ・ 法 事	67	32	20	15
祈 禱	19	9	21	15
他 寺 法 務	9	4	4	3
収 益 事 業	18	9	0	0
兼 業	0	0	0	0
そ の 他	17	8	4	3
計	207	99	136	100

(1位を3点、2位を2点、3位を1点で算出)

I-(2)-d 主な収入源ベスト3 (市内外別)

	市 内		市 外	
	点	%	点	%
月 回 向	12	9	17	23
年 中 行 事	30	23	18	24
葬 儀 ・ 法 事	44	33	23	31
祈 禱	12	9	7	9
他 寺 法 務	8	6	1	1
収 益 事 業	15	11	3	4
兼 業	0	0	0	0
そ の 他	11	8	6	8
計	132	99	75	100

(1位を3点、2位を2点、3位を1点で算出)

I-(3)-a 檀家数

	福 岡		札幌%	全国%
	寺	%		
な し	6	16	4	4.2
1～50戸	5	13	22	27.7
51～100戸	0	0	17	20.8
101～200戸	11	29	22	22.1
201～300戸	3	8	9	11.6
301～400戸	7	18	9	4.7
401～500戸	1	3	9	2.4
501～1000戸	2	5	9	2.8
1000戸以上	0	0	0	0.6
不 明	3	8	0	3.2
計	38	100	100	100.0

I-(3)-a 檀家数 (市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
な し	3	3	13	21
1～50戸	3	2	13	14
51～100戸	0	0	0	0
101～200戸	4	7	17	50
201～300戸	3	0	13	0
301～400戸	5	2	21	14
401～500戸	1	0	4	0
501～1000戸	2	0	8	0
1000戸以上	0	0	0	0
不 明	3	0	13	0
計	24	14	102	99

I-(3)-b ①信者数

	福 岡		札幌%
	寺	%	
な し	2	5	4
1～50人	16	42	35
51～100人	6	16	17
101～200人	4	11	13
201～300人	2	5	9
301～400人	1	3	0
401～500人	1	3	4
501～1000人	1	3	9
無 回 答	2	5	9
不 明	3	8	0
計	38	101	100

I-(3)-b ①信者数 (市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
な し	0	2	0	14
1～50人	10	6	42	43
51～100人	3	3	13	21
101～200人	4	0	17	0
201～300人	0	2	0	14
301～400人	1	0	4	0
401～500人	1	0	4	0
501～1000人	1	0	4	0
無 回 答	2	0	8	0
不 明	2	1	8	7
計	24	14	100	99

I-(3)-b ②主な年齢層（複数回答）

	福 岡		札幌%
	寺	%	
20歳代	1	2	0
30歳代	1	2	6
40歳代	5	9	18
50歳代	11	20	33
60歳代	21	39	27
70歳代	8	15	0
80歳代	1	2	0
全 部	1	2	0
無回答	5	9	15
計	54	100	99

(回答者数 38カ寺 23カ寺)

I-(3)-b ③主な性別

	福 岡		札幌%
	寺	%	
男	1	3	0
女	16	42	39
どちらとも	16	42	52
無 回 答	5	13	9
計	38	100	100

I-(3)-c 檀信徒の増減

	福 岡		札幌%	全 国	
	寺	%		檀家%	信者%
増加傾向	19	50	61	53.2	43.5
減少傾向	1	3	13	8.3	6.5
変化なし	16	42	26	30.2	40.0
不 明	1	3	0	8.3	10.0
無 回 答	1	3	0	0	0
計	38	101	100	100.0	100.0

I-(3)-c 檀信徒の増減（市内外別）

	市内	市外	市内%	市外%
増加傾向	11	8	46	57
減少傾向	1	0	4	0
変化なし	11	5	46	36
不 明	1	0	4	0
無 回 答	0	1	0	7
計	24	14	100	100

II-(1)-a 月回向の有無

	福 岡		札幌%
	人	%	
有	24	63	96
無	12	32	4
不 明	2	5	0
計	38	100	100

II-(1)-a 月回向の有無（市内外別）

	市内	市外	市内%	市外%
有	14	10	58	71
無	9	3	38	21
不 明	1	1	4	7
計	24	14	100	99

II-(1)-b 月回向の戸数(母数24)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
1～50戸	18	75	23
51～100戸	2	8	18
101～200戸	2	8	32
201～300戸	0	0	5
301～400戸	0	0	18
401～500戸	0	0	0
501戸以上	0	0	5
不 明	1	4	0
無 回 答	1	4	0
計	24	99	101

II-(1)-c 所要時間(母数24)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
10分以上	1	4	5
11～20分	4	17	27
21～30分	10	42	59
31～40分	3	13	5
41～50分	1	4	0
51～60分	4	17	5
不 明	1	4	0
計	24	101	101

II-(2)-a 祈禱会

	福 岡		札幌%
	寺	%	
1 割	3	8	4
2 割	1	3	4
3 割	4	11	26
4 割	2	5	4
5 割	5	13	17
6 割	4	11	9
7 割	5	13	4
8 割	3	8	17
9 割	0	0	9
不 明	8	21	0
無回答	3	8	4
計	38	101	98

II-(2)-b 施餓鬼会

	福 岡		札幌%	全国%
	寺	%		
こ ない	0	0	0	2.1
1 割 位	3	8	0	4.6
3 割 位	8	21	8	17.3
5 割 位	7	18	35	20.5
7 割 位	6	16	30	25.1
ほぼ全員	4	11	17	18.0
していない	0	0	0	9.3
不 明	7	18	0	0.0
無 回 答	3	8	9	3.1
計	38	100	99	100.0

II-(2)-b 施餓鬼会(明細)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
1 割	3	8	0
2 割	2	5	4
3 割	6	16	4
4 割	1	3	13
5 割	6	16	22
6 割	3	8	13
7 割	3	8	17
8 割	2	5	13
9 割	1	3	4
10 割	1	3	0
不 明	7	18	0
無回答	3	8	9
計	38	101	99

II-(2)-c 彼岸会

	福 岡		札幌%
	寺	%	
1 割	1	3	0
2 割	1	3	9
3 割	3	8	22
4 割	3	8	17
5 割	6	16	17
6 割	3	8	0
7 割	5	13	22
8 割	2	5	9
9 割	2	5	0
10 割	1	3	0
不 明	8	21	0
無回答	3	8	4
計	38	101	100



Ⅱ-(2)-d お会式

	福 岡		札幌%	全国%
	寺	%		
こない	1	3	0	2.8
1 割 位	2	5	0	9.1
3 割 位	11	29	43	26.2
5 割 位	9	24	26	21.7
7 割 位	2	5	4	19.2
ほぼ全員	4	11	21	12.0
していない	0	0	0	6.0
不 明	6	16	0	2.9
無 回 答	3	8	4	0.0
計	38	101	98	99.9

Ⅱ-(2)-d お会式 (明細)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
こない	1	3	0
1 割	2	5	0
2 割	7	18	17
3 割	4	11	26
4 割	4	11	17
5 割	5	13	9
6 割	1	3	0
7 割	1	3	4
8 割	2	5	17
9 割	0	0	4
10 割	2	5	0
不 明	6	16	0
無回答	3	8	4
計	38	101	98

Ⅱ-(2)-e 信行会

	福 岡		札幌%
	寺	%	
こない	3	8	0
1 割	6	16	17
2 割	5	13	17
3 割	3	8	0
4 割	0	0	0
5 割	1	3	4
6 割	0	0	0
7 割	0	0	4
8 割	1	3	0
9 割	0	0	4
不実施	0	0	22
不 明	16	42	0
無回答	3	8	30
計	38	101	98

Ⅱ-(3) 最も力を入れている  
布教方法ベスト3

	点		比率	
	市内	市外	市内	市外
文 章	6	5	6	7
法 話	15	8	15	12
修 法	23	19	23	28
行 事	7	2	7	3
勉強会	10	1	10	1
信行会	16	10	16	15
法 要	9	14	9	21
対 話	9	0	9	0
その他	5	9	5	13
計	100	68	100	100

(①3点、②2点、③1点で算出)

Ⅱ-4) 人口に対する本宗寺院の割合

	福 岡		札幌%
	寺	%	
多 い	1	3	0
適 当	15	39	52
少 な い	11	29	35
わからない	7	18	9
無 回 答	4	11	4
計	38	100	100

Ⅱ-4) 人口に対する本宗寺院の割合(市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
	多 い	1	0	4
適 当	11	4	46	29
少 な い	5	6	21	43
わからない	5	2	21	14
無 回 答	2	2	8	14
計	24	14	100	100

Ⅲ-1) 主な葬儀式場(複数回答)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
自 宅	18	34	0
寺 院	4	8	10
貸 斎 場	25	47	52
集 会 場	0	0	38
そ の 他	0	0	0
無 回 答	6	11	0
計	53	100	100
葬儀せず	2件		0件
葬儀なし	2件		0件

(回答者数 38カ寺 23カ寺)

Ⅲ-2) 葬儀時の平均的役僧数(複数回答)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
0 人	0	0	3
1 人	4	11	17
2 人	16	43	28
3 人	9	24	48
4 人	1	3	0
5 人	0	0	0
6人以上	0	0	3
無 回 答	7	19	0
計	37	100	99
葬儀せず	2件		0件
葬儀なし	2件		0件

(回答者数 38カ寺 23カ寺)

Ⅲ-3) 法号料等の山納金

	福 岡		札幌%
	寺	%	
有	10	26	65
無	22	58	26
無回答	6	16	9
計	38	100	100

Ⅲ－(5) 葬儀社からの依頼の葬儀数

	福 岡		札幌%
	寺	%	
0	6	16	43
1～6	20	53	26
7～8	1	3	0
10～15	2	5	17
葬儀せず*	1	3	0
断 る	1	3	0
無 回 答	7	18	13
計	38	101	99

Ⅲ－(5) 葬儀社からの依頼の葬儀数(市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
0	4	2	17	14
1～5	11	9	46	64
6～10	2	1	9	7
葬儀せず*	1	0	4	0
断 る	1	0	4	0
無 回 答	5	2	21	14
計	24	14	101	99

Ⅲ－(6) 納骨堂利用率

	福 岡		札幌%
	寺	%	
1 割	0	0	14
2 割	0	0	9
3 割	1	3	23
4 割	1	3	9
5 割	1	3	5
6 割	1	3	9
7 割	6	16	5
8 割	4	11	14
9 割	10	26	5
10 割	1	3	0
ほぼ全部	1	3	0
墓なし	3	8	0
檀家なし	2	5	0
無 回 答	7	18	9
計	38	102	102

Ⅳ－(1)－① 墓の後継者問題

	福 岡		札幌%
	寺	%	
あ る	17	45	52
な い	12	32	30
無回答	9	24	9
不 明	0	0	9
計	38	101	100

Ⅳ－(1)－① 墓の後継者問題(市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
あ る	12	5	50	36
な い	6	6	25	43
無回答	6	3	25	21
計	24	14	100	100

IV-(2) 他の信仰物

	福 岡		札幌%
	寺	%	
黙っている	4	11	4
説明し外させる	19	51	76
絶対に外させる	2	5	8
そ の 他	8	22	8
無 回 答	5	11	4
計	38	100	100

(札幌のみ複数回答…23人)

IV-(3)-① 寺檀増加の可能性

	福 岡		札幌%
	寺	%	
可 能 性 十 分	9	24	39
やりようによって	16	43	44
不 可 能	5	14	0
増 や す べ き	0	0	4
そ の 他	1	3	0
無 回 答	7	16	13
計	38	100	100

IV-(3)-① 寺檀増加の可能性 (市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
可 能 性 十 分	8	1	33	7
やりようによって	5	11	21	79
不 可 能	5	0	21	0
増 や す べ き	0	0	0	0
そ の 他	1	0	4	0
無 回 答	5	2	21	14
計	24	14	100	100

IV-(4) 現状の檀家制度の維持(複数回答)

	福 岡		札幌%
	寺	%	
現状で心配ない	6	16	30
僧侶の努力で守る	13	33	48
会員制等新しい形	4	10	4
不安あり対処不明	2	5	4
そ の 他	7	18	4
無 回 答	7	18	9
計	39	100	99

(福岡のみ複数回答)

IV-(4) 現状の檀家制度の維持 (市内外別)

	市内	市外	市内%	市外%
現状で心配ない	4	2	16	14
僧侶の努力で守る	10	3	40	21
会員制等新しい形	2	2	8	14
不安あり対処不明	2	0	8	0
そ の 他	3	4	12	29
無 回 答	4	3	16	21
計	25	14	100	99

(市内のみ複数回答)

## IV 福岡データー オープンアンサー一覽

※文章は原則として原文どおりに記載した。

※調査地は福岡市及びその周辺地域で、その区分を新市街地・旧市街地・非市街地の3つに区分した。具体的には下記ようになる。

新市街地	寺院周辺で近年人口が増えている地域 東区・早良区・博多区・筑紫郡・粕屋郡の一部 西区・城南区・南区・宗像郡・宗像市・大野城市・筑紫野市・太宰府市の全カ寺	18カ寺
旧市街地	寺院周辺が旧来の市街地 博多区・東区の一部、中央区の全カ寺	14カ寺
非市街地	寺院周辺が過疎地域 東区・早良区・筑紫郡・粕屋郡の一部、前原市の全カ寺	6カ寺

### 設問番号 I-1(3)-d Q. 最も多い入檀、入信の理由

- 新市街地
- 祈禱。
  - 都市、地方、他県へ移り住み、家族が死亡して葬儀を依頼される。入信は霊断で。
  - 他県からの移転。
  - 入檀：新興住宅地があり、菩提寺のない家が多い。  
入信：病気などの相談ごとによる。
  - 先代の住職によって導かれた。
  - 納骨堂への加入。日蓮宗への帰依（最上様を御縁に、霊断・祈禱による現世利益を契機として）。
  - 個人的な関係、檀家の紹介、寺院との距離。
  - 葬儀社紹介による。
  - 移転の為。
  - 檀信徒の紹介、霊園の紹介。
  - 納骨の加入をきっかけに、もともと日蓮宗の家で育ったために、檀家になる。
  - 病気等の悩み解消により、お題目の信者となって信者となる。
  - 年諸行事において、住職、寺族並びに総代各世話人等による伝道布教活動（月回向時、月施餓鬼会、月祈禱会、各会諸行事時）。
  - 当寺は、参拝するには立地条件が良いと思われ、特に納骨堂加入等の設備が評判が良いようである。
  - 入檀：葬儀社に葬儀依頼されて檀家になる。  
入信：各種相談ごとから（気学、霊断）。
- 旧市街地
- 引っ越しと住職の態度に納得して。

- 分家の死亡による入檀。
  - 誠実…話をよく聞いてくれる（心の拠り所）、金銭的に負担や無理が少ない（檀家の方や仏具屋さんの紹介）。
    - 派手さがなく堅実、霊舎、墓地の管理が安心できる。
  - 交通の便が良い（自宅が近い、買い物に便利）。
  - 精神的な悩みを抱え寺に来る。
  - 入檀…農村部より移転。
    - 入信…病気・悩み事。
    - 先祖供養、病気平癒祈願、入学祈願など。
    - 病気平癒、信者寺の為、檀家に成りたい人は他寺へ紹介する。
    - 修法、尼さん（弟子）の導きによる。
    - 肉親との死別。
    - 納骨堂加入、月例読誦会への参加。
- 非市街地
- 分家による入檀がほとんどである。
  - 祈禱による心願成就。

設問番号Ⅱ一(5) Q、今後有効だと思う布教方法は何だとお考えですか。

- 新市街地
- 祈禱・九星。
  - 団地や住宅開発の時、布教所を作り、副住職で若い人を登用する。
  - 宗門の持つ独自性、今のところ修法以外にはない。
  - お説教（現代にあった、現代人にわかる言葉で）。来寺してもらうきっかけ作り（占い）。
  - 修法、霊断、言説を合わせての布教や文書作成による布教。
  - 護持教会を中心に、対話をする講座、視聴覚布教、FAXを利用した解説等。
  - 御祈禱布教、葬儀布教。
  - 開かれた寺院作り、大衆の要望に答えるものを用意。
  - 修法、霊神符の拡大の方法で縁を作る。
  - 日蓮聖人の教え、お題目に帰依させる。
  - 若い人を対象とした、集会等の言説布教。
  - 悩みを解消できるような場を寺院が提供する。
  - 解りやすい言葉、例を使って布教する。
  - 車のお払い、相談ごと、水子供養。
  - 有効と思う方法をむしろ教えてほしい。
  - 霊断、修法。
  - 年諸行事において、住職、寺族並びに総代各世話人等による伝道布教活動（月回向時、月施餓鬼会、月祈禱会、各会諸事時）。
  - 伝道布教活動を地道に努力していきたいと思う。
- 旧市街地
- 自分の信念を説くような、アメリカの牧師のように人を魅了するほどの情熱的な説教。
  - 毎回、毎回形式的でない、力強い説教。
  - 静かに暮らすこと。いらぬことをしない。

- 心暖かな法話・祈禱・インターネット等を使い、現代にわかりやすい、受け入れられやすい宗門教学の解説をし、心の集いの仲間、呼び掛け等勉強会の普及。
  - 人を助け、法華經の素晴らしさを教えてあげる。個別の布教。
  - 個人的には気力次第。全体的な宗門・宗教のイメージアップが大事なのではないか。対社会的な活動。
  - 法華經の一般公開講座を宗門として各ブロック毎に専門の講師を養成して行ってほしい。
  - お寺を人々がお参りしやすい場所にする。信徒同士の交流。信徒活動の活性化。家族全体への働きかけ。
  - 教会としての度量を守っていかないといけない。信徒には他寺の檀家がいる。現証利益を求める女性が多い。どこの檀家かは特に聞かない。人を助けないといけない。經文の文句をいってもしょうがない。靈界と切り離してはいけない。崇りとかはない。心の行。医学を尊重。30歳以下の人にはわからないので、中高年が対象。
  - 魅力ある寺づくり。身の上相談のような個人的対話。住職の型にはまらない魅力ある対応。会館の積極的な利用。例えば齋場としてだけではなくお茶などの集会にも利用する。世話人の充実。
  - 信仰空間としての「寺」の活用。「お経」をありがたく読み、考えさせる。
  - 個人との対話。住職個人の魅力を伝える。家族との対話。
  - 悩み事は新宗教、法事・葬式は寺でと考えている人が多いよだから、法事・葬式をきちんとやって、月回向・お彼岸などでじっくりと話す。月回向は共稼ぎが多く、ゆっくりと話す機会が少なくて困る。
  - 言説布教、因参布教。
- 非市街地
- 修法布教・靈断布教・大祭・言説布教。
  - 御祈禱布教。

設問番号Ⅳ－(1)－②－1 Q、墓の跡継ぎがないという問題に対して、寺院としてどう対応すべきか。具体化している場合の内容は？

- 新市街地
- 平和塔に合祀する。
  - 菩提寺にて永代供養。
  - 永代供養へ（納骨堂内に永代供養用のスペースがある）。
  - 身寄りが無い場合は永代供養として行う（布施は自由で）。
  - 永代供養をしてもらい、お骨は永代納骨壇に安置を考えている。現在7名ほど入れる予定。現在、新本堂建設中、その中に納骨壇を設置。
  - 誰かが継いでくれればという考えはあるが、まだ、そこまで考えていないのが現実。
  - 現代の若い世代の人々の信仰心離れが多い為、先々不安。
  - 後継ぎが無い場合は、ご家族、又は関係者が生存中に永代供養をして頂き、お骨は一定期間の後、納骨堂の永代供養専用の場所に安置する。
- 旧市街地
- 永代供養墓を造立する。
  - しっかりとした無縁供養塔を造るべきである。

- 合祀納骨堂の必要性。
- 子供を生まないのは国家的問題でどうしようもない。
- 永代供養墓（祀り手不在に限る。例：娘のみ）。2月降誕会、歴代上人の報恩と永代供養法要。勉強会の日に兼ねてやる。
- 後継者無き場合、代表者（施主）と事前に相談し善処する（永代供養…寺の永代供養簿に記入し舍利塔に納める。）。

設問番号Ⅳ－(1)－②－2 Q、現在考えている方は、その内容をお聞かせ下さい。

- 新市街地
- 全ての命は繋がっている。個々の先祖供養を怠らず、魂に対する認識を明らかにし、宗教宗派間の垣根を超え、普遍妥当の真理を探求し、集合的墓を造る。
  - 寄せ墓の形式が良いと思っている。
  - 永代供養を勧めている。
  - 生前から永代供養料を月割りで納めてもらい、法号の生前授与儀式を行い、安心感を与える。
- 旧市街地
- 墓地ないし納骨堂を必要に応じ開けさせていただき永代供養墓でご回向していきたい。
  - 永代供養制度の確立とその運営…永代経料は住職個人の収入ではなくお寺全体の基金とする。
  - 永代経料・永代供養墓を検討中。

設問番号Ⅳ－(3)－② Q、今後福岡市で日蓮宗は寺院を増やしたり、檀信徒数を増やしたりすることができるでしょうか。①で「1、可能性は十分ある。②やりようによっては可能」を選ばれた方は、その方法はどのようなことが考えられますか。

- 新市街地
- 日蓮宗同士の檀家の取り合いは避けたい。真宗の檀家制度がしっかりしている。
  - 他の新宗教、精神世界活動の団体、気功、ヨガ等の団体を知り、時代のニーズに応えられるシステムを作る。
  - 文書などを充実させたり、霊断などの宣伝をするといったことを検討中。
  - 寺院より教会、結社の設立、気軽に入れるような造りで、祈禱、悩み事相談。
  - 土地購入（お金があれば）。
  - 私財を投資し、建設する（少しでも宗門のback upがあれば）。
  - 釋尊、日蓮大聖人のお教えに基づいて、四苦八苦の苦しみを聞いて解決してあげることです。
  - 信者を増やすのは割りに楽、市内の日蓮宗檀家の人がこっそり来る。
  - 市内寺院はなかなか親身になれないから来る。駅前の葬儀社からの紹介。
  - 修法、霊断、人生相談。
  - 地域布教センターを設置の上、教化活動をする。
  - 近郊の住宅地においては可能であると思う（福岡市内を省く）。
- 旧市街地
- 福岡市内は、ドーナツ化現象で人口が減っていくので檀家増は無理。しかし、郊外人口の人々が、都会に出勤したり、遊びに来るような感覚でご先祖に会いに来るような形で納骨堂の増加はあるかもしれない。



- 興味なし。
  - 今後の都市開発計画も含み、東区に宗門寺院が少ない。誠実で法話と祈禱力ある心暖かな僧侶の努力で飛躍可能。
  - 宗門の力で不足している託児所（夜11時頃まで預かる）経営とタイアップで新寺建立も効果があるかもしれない。
  - 本当に布教し、本当の法華経を示せば可能。本当の法華経の素晴らしさを体験させる。
  - 組織としては無いが、個人がやる気になればできるのではないか。宗門が援助をして新寺を造っても、周辺の寺院にはプラスになるとは限らない。商売仇を作るようなもので檀家の取り合いになる。移住した人が、センターに行って周辺寺院に振り分けられるような施設のバックアップは必要だと思う。旧本山も性格的にはセンターのようなものであった筈である。現在はセンターの役割を果たす寺院が無い。
  - 入れ替わりが多く、人口の割に寺数が少なく、寺はかたまっている。そのため寺院のない場所がある（東区）。銅像は自由にお参りできることが強み。若い人が住職になれば布教できる。
  - 僧侶の魅力。
  - 考え方によるが、お経練習・接待ご飯等寺らしく（建築）、うちの寺という感じを持ってもらう方策。
  - 住職の努力。
- 非市街地 ○檀家制度が確立しているが故に新寺建立は困難。  
○お金次第。

設問番号 IV-5) Q、一般に若い人がお寺に来ることが少ない状況ですが、あなたのお寺ではそのために何かなさっていますか、あるいは考えていますか、お聞かせ下さい。

- 新市街地 ○相談事などで若い人々も寺院に訪れる機会がある。
- 盛運祈願祭（霊神符の拡大）で若い人にお経の練習と法話をする。
  - 仏教用語をあまり使わない（意識やマイナスエネルギーといった言葉に変える）。病気の原因等、何でも霊障にしない。色々な分野の人たちに講演してもらう。
  - 住職が元気な時は、占い・祈禱で来ることもあった。
  - 寺の行事の内、一部を日曜日・祭日に行う。
  - 身延の音楽ライブ、お会式生け花展示の復活、寺と違和感があるけれど大胆なことをする。子供会の復活。仏事以外での寺院空間の有効利用。
  - 仏縁次第、住職行動、布教次第。
  - 現在は何もしていないが、何か対応していきたいと思っている。
  - 小、中学校を対象に林間学校や、写経、読経の方法で集め、お寺との縁を深めることが先決です。
  - 息子が帰ってきて方法は考えていきたく思っております。
  - まだ住職になったばかりでこれといってしていないが、信徒青年会のような集まりを作って、堅くない遊び心で活動したい。

- 行事をなるべく休日（日曜日）に行うようにしている。
  - 若い方の組織（青年会）を作り、行事参加に積極的に取り組めるように出来れば良いと思う。
  - 若い人にジーンとくる法の説き方。宇宙観など。
  - 霊園開発の資金。
  - 青少年育成会、練成道場、青年会、林間学校その他の開催。
- 旧市街地
- 法事の後、常に説教をし人間としての幅を見せ、若い人が気楽に話しかけられる僧侶になるべき。無言でお付き合いし、お経を読んで帰ってくるテープレコーダーのような付き合いでは形式的な寺檀関係で終わりがち。
  - なし。せめてお寺ぐらいはお年寄りのくつろげる静かな場所であるべき。
  - 寺の開放。共感する趣味の会・地域の会に場所を提供している。…土・日の希望が多く檀家さんにご迷惑がかかる悩みもある。
  - 本年より御会式を休日に行い、バザー落語なども加える予定。
  - 彼岸参詣時、ビデオ室を用意し、本山霊跡案内・国宝の旅・震災慰霊行脚・沖繩慰霊法要等ビデオで視覚に訴えたい。
  - 子供図書の充実。
  - 悩みごとで来るため、霊障を見てあげる。預かって治してあげるので泊まれる施設を作りたい。
  - 自分が若いときは青年会を作ってやっていたが、年を取ると一緒に遊べなくなりやめた。一緒に騒ぐことが大事。
  - 先祖供養の意義をしっかりと説いて聞かせること。
  - 社会倫理を身に付けさせるよう指導すること。
  - 若い人の悩みに応えられるようにすること。
  - 若い人は日本語を知らない。家庭を持つか、親と一緒に来ないとダメ。若い人の考えはわからない。宗教とか信仰とか何もわかっていない。昔はありがたい話をすればありがたがってくれたが今はそうはいかない。
  - 日曜日に行事を行っている。長話はしない。仕事をつくる。行事250人分年5回。
  - 読経練習。
  - しゃくだが修法・霊断で若い人が来るようになった。日曜日に行事をする。
  - 節分と星祭りに子供連れでこられるよう福引きなどの楽しみを用意する。また、漫画など子供向けの本を置いた部屋を用意している。子供向けの交通安全教室（婦警さん）を日曜に行く。
  - 家族そろっての参詣。特別なことは何もしていない。老若の集まりはよくない。若い人ならそれだけを集めて少なくともよしとすべきだ。
- 非市街地
- 霊断・修法・七五三参り。
  - 何もしていない。若い人が住職を慕ってやってくる。青年部があった。

設問番号Ⅳ－(6) Q、今後の寺院運営の悩みと問題点をお聞かせ下さい。

- 新市街地
- 檀家数が多い寺は、布教活動は不可能。
  - 納骨堂建立によつての檀家制度の確立。
  - 日々の法務に追われ、なかなか布教ができない。新宗教の布教の活動が大変盛ん

であり、僧侶の信用は無いに等しい。その現実を当の僧侶があまりにも知らなさ過ぎる。

- 住職が病身なので運営も何も無い。自分（寺庭婦人）の収入で、やれる範囲のことしかできない。
- 自坊で行う諸行事に際する人材の養成。
- 護持会、志納金による寺院運営に対し、霊園墓地購入により煩わしい関係を否定、特に寄付行為に対しては強く感じられる。その折りは宗門も認識が必要。
- 葬儀の布施に頼るしかないという現実（特に750慶讃の課金）。
- 僧侶が全てをしなくてはならない点。
- 社会全体、宗教意識がなくなっている現状。
- 墓（納骨堂）後継者の減少。
- 寺の歴史が新しいため、檀家となった人達も古い家が少ない。
- 住職になったばかりでははっきりわからない。
- 参拝する人の高齢化。熱心な信者（題目）ほど他の寺へ移りやすい。
- 法華経を信仰する人は、寺にとられなくていいはず。その点、檀家制は安定性はあるが本来の信仰からいうと悩みあり。
- 檀家が学会等へ入る。教育。護持会費を納める人、3割。課金等が大変。わざわざもらいに行けない。
- 信仰離れ。

#### 旧市街地

- 現檀信徒数の確保、減少なく時代の変化に対応できる布教方法を知りたい。
- 葬儀業者中心の葬式になりつつあり、僧侶はただの部品で使われている。また、その傾向が強くなるにつれて、僧侶中心の指導をする僧侶がおかしいと思われるような世の中の風潮は怖い。
- 寺院運営などなるべく考えないこと。
- 町寺院ほど檀家さんとの関係がクールになり法事・墓参り等ご先祖供養中心で、もっときめ細かな心の触れあいに努力しなければと思う。
- 他県居住の檀家さんへの交流努力。
- 新道場の建立を成功させたい。今の所では太鼓がたたきにくい（騒音問題）。
- 寺院が住職並びに寺族の生活の場に墮している（信仰の道場としての本来の機能が低下している。寺族がしっかり信仰しているか）。
- 中2・小6の息子が後を継ぐかが悩み。
- 寺院収入の安定（月回向といった固定収入が無い）。
- 未信徒の教化（旧来の檀家の中の一部が信仰上熱心でない）。
- 人口の都市集中化と核家族化などを熟考すべき。後継子弟の僧侶教育。
- 一人住まい・シングル者などの死の問題。
- 寺と檀信徒のつながりを深める方法を考えたい。
- 勉強不足。自分なりの情報しかない。宗教的問題を深く考えられないし、また難しく語っても聞いてもらえない。
- とにかく努力。少しでもよい方向に向くよう考える。具体的にはわからない。

#### 非市街地

- エホバの信仰。葬儀の時焼香をしない。
- 借地の寺の為、そして山上の為、生活そのものが大変（檀家なし）。

設問番号Ⅳ一(7) Q、今後の宗門、ことに若い僧への期待、提言をお聞かせ下さい。

新市街地

- 若い年代は葬儀だけではなく、布教活動に専念することを望む。
- 修法布教の充実。
- 地球的規模で今、世の中は大きな転換期を迎えている。新しい物を生み出していく必要あり。
- 頑張ってください。
- 最近、若い僧の僧侶としての自覚の無さが顕著である。世襲制の弊害も一理由では？経済的に恵まれ過ぎており、ハンタリーさが無い。檀家制度があるため安心してしまっている。僧風教育する場が必要である（信行道場ではダメ）。
- 檀家制度にアグラをかく事なく、一般社会を良く理解する。又紫衣に緋では教化は出来ない。袈裟、衣に恥じないような僧侶になるよう努力、所作は禅宗に学ぶ、今の宗門人も学ぶところ大であると思う。
- 僧侶らしく。
- 宗門の組織力を高めてもらいたい。
- 宗門としての金銭的 b a c k u p、人材を適材適所へ。
- 檀信徒のために御本尊を本山に威厳をもって与えられるシステムに。
- 隣接地を購入したいが宗門が貸してくれる給金制制度が欲しい。
- 現代的布教マニュアルの作成。
- 仏所護念会教団の信者と縁ができた。法号・葬儀次第で入檀したり仲間を連れてきた。そのへんを宗務院は融通する現実的なマニュアルを作ってほしい。
- 期待していない。我々が直寺の信者として宗門は大事にしてくれればいい。
- オウムの様な信仰への対応のパンフレットが欲しい。
- 宣伝、我々？との違い、批判をきちんと出してほしい。
- 末端寺院の布教努力を評価出来る宗門であって欲しい。
- 自坊だけではなく外への布教を若い僧侶に期待したい。
- 生きた宗教、真に困っている人に門戸を広げて対応してくれる寺院。
- 悩みを持つ人への適切なアドバイスができる仏教。
- 若い人が魅力を持つ活動。

旧市街地

- みんな若い時には遊んでも晩年は素晴らしい僧侶になっているが、しかし、車・ゴルフ・女・賭け事・飲み屋…凄まじいものがある。私たちの時代と違って、オウムの影響かもしれないが宗教に厳しい時代になってきており、国民一般の人々が、僧侶が年を取って素晴らしいお坊さんになるまで待ってくれなくなってくるのではないか。それが心配。
- とかく建物や構えを立派にすることや檀信徒を増やすこと、宗門行事・大会を大きく開くこと等はなるべくやめること。自分自身が静かにすること。
- お祖師様の魂宿る清浄な霊地身延山での数年の僧道実習体験等の義務付けにより、真に行学二道の重みの解る、情のある僧侶を養成すべきだと思う（頭でっかちが多い）。
- もう少しマスメディアを上手に使い、宗門の活動（沖縄慰霊法要・震災慰霊行脚等）を世間にPRしてもよいと思う（若い人に仏前結婚式をしたいと思わせるような荘厳で簡単、素敵な演出を考え普及させることも必要）。

- 学校に社会に家庭に疲れた人たちが、立ち直る駆け込み寺兼作業所もあるとよい。
  - 若い人には法華經に燃えてほしい。後継すればよいではダメ。僧侶全員が信者さんに法華經を弘めてほしい。法華經の素晴らしさを体験し弘めてほしい。青年会も燃えてほしい。
  - 『日蓮宗の近現代』（日蓮宗現代宗教研究所編）を評価する。我々も早く管理しなければいけない。このようなことをもっと早くしてほしい。
  - 若い人には、共同作業をする人が少なくなった。自分の好きな事は進んでする人が多い。
  - 行学二道の精進が足りない（法華による救済の自覚が個人により違う）。
  - 本化の僧としての自覚やプライドをしっかりと持ってほしい。
  - ここは九州の人なら誰でも主管になれる。もっと若いやる気のある人がなると発展する。
  - 軍隊と自衛隊との差である。年齢によって良くなっていく。本山のご供養の時間が短い。もっとお経とお題目を長くしてほしい。崇りについて関心のある人が多い。北国の人は崇りという人が多い。これは外部との交流が少なかったからではないか。福岡では少ない。しかし、女性は年を取ると大なり小なり靈障の觀念がでてくる。崇りは知らせであって次に“とがめ”が来る。自然というものを全然解っていない人が多い。
  - 宗門に対して…福利厚生 の確立（寺族を含めた企業のようなサービスを）。
  - 若い僧に対して…世襲化に甘んじず、道念堅固な僧侶に育ててほしい。
  - 熊谷の立正大の寮など課金納入に大疑問を持つ。
  - 宗務機関の簡素・有能化を！（郵便物など）
  - 本を読むことが少ないようだ（宗門に関する本以外のものを…）。
  - もっと檀家だけではなく、あるいは宗門に凝り固まるのではなく世間に目を向けた広い視野を持つべきだ。
  - 議論が許される宗門。
  - 宗門に対して…役職は任期を全うせよ。無駄な宗費を使うな。宗会で要職を握らず、広く人材を集め対外的に通用する人を登用せよ。東京中心には賛成する。これが宗門の発展につながる。行政改革をすべきである。今の宗費で十分賄える。金は使うべきところに使うべきだ。
  - 若い僧に対して…若い事は結構だが、着ているものが華美になり過ぎてはいないか。基本的な常識をわきまえろ。例：僧階相当の改良服にする。院では宗章紋の五条をつける。宗定をもっと遵守すべきである。
- 非市街地
- 布教研修所出身者の活躍が見られない。
  - 僧侶らしく。

## 日蓮宗医療問題研究会

# 日蓮宗ビハーラ講座開設 に向けての研修レポート

### I 目的

日蓮宗医療問題研究会では、ビハーラ講座開設に向けて、その内容について検討を重ねる過程において、実際に終末期医療や高齢者福祉に取り組んでいる教育施設、研究機関、医療施設等を見学研修し、実態を把握することによって、講座の内容、カリキュラムの内容を検討する資料とすることを目的として訪問研修を行なった。

### II 訪問施設及び日程

平成7年12月4日（月）～5日（火）

12月4日 午前「法音寺学園『中央総合福祉専門学校』」（名古屋市鶴舞）

午後「老人保健施設『アウン』」（一宮市浅井町）

12月5日 午前「法音寺学園『日本福祉大学』」（知多郡美浜町）

### III 参加者

日蓮宗医療問題研究会メンバー

奥田正叡、蟹江一肇、古河良皓、柴田寛彦、山口裕光、渡部公容  
早坂鳳城主任、竹岡智大所員

### IV 研修レポート

1、法音寺学園『中央総合福祉専門学校』

法音寺学園は、本宗の法音寺の鈴木宗岳師により社会福祉専門の短期大学として1953年に創立され、現在日本福祉大学（大学院、女子短期大学部、附属高等学校）、中央総合福祉専門学校により構成された、国内では有数の古い伝統ある福祉専門の学校群である。

私たちはまず名古屋市鶴舞の中央総合福祉専門学校を訪れ、山際耕兄教授、及び長岩嘉文企画事業室課長補佐から説明を受け、授業風景を見学した。

山際耕兄教授：中央総合福祉専門学校は、1987年に国家資格としての介護福祉士と社会福祉士とが制定されると同時に開学され、介護福祉士科と社会福祉士科とがある。いずれも国家資格と関連しているため、カリキュラムに関する厚生省の基準はかなり厳しい。各科100名定員に対して110名程度の入学生を受け入れるが、中退はほとんどない。女性80%男性20%の男女比である。卒業生の進路は、80%が老人福祉関係、10%が生涯福祉関係に就職し、5%は福祉大学に進学、残り5%が自営その他となっている。汗を流し、身体を動かして奉仕し、「チャンス アンド チャレンジ」をモットーとしている。阪神大震災に際しては、ボランティア希望者が多数いたが、60名にしぼって学校からの派遣としてボランティア活動を行なった。異なる年代の人たちとつきあうことができる「異種の哲学」の大切さを教えている。福祉の現場は、新3K（感謝、感激、感動）である。

カリキュラムは、国家試験受験に際して必要な科目でほとんどが占められている。国家試験合格率は、全国平均約20%程度に対して、当校では75%の合格率である。

長岩嘉文企画事業室課長補佐：福祉の問題の最近の動きには、次の四点の背景がある。①平成5年以降、各地方自治体で福祉計画を作成し、独自の福祉行政を展開するようになったこと、②「福祉カルテ」を作って、どこにどのようなニーズを持った人がどれだけいるのかを常に把握する、それらの情報をデータベ

ース化して管理する、種々のシステムを有効に活用するためのマネジメントが重要になってきているなど、「情報化」に格段の進歩が見られること、③医療、心理などの隣接領域との緊密な連携がますます重要になってきていること、④経済的な負担の問題の解決のため、介護保険を制度化したいという国の意向があること、などである。

家庭介護の意向が強いが、今後はそうは行かない。従来の「施設」の考えが変わってきており、快適な居住空間の提供が求められてくる。寝たきりや痴呆になったときに、本人がどう生きるか、周囲がどう支えていくのかといった、心理面での研究が足りない。人間的な交流をどう作っていくのかが大きな課題である。ホスピスでの看護の役割は、先端医学の看護とはおのずから異なるはずであり、医療と保健と福祉の連携が必要である。医療でフォローすべきところと、福祉でフォローすべきところをどのようにマッチングさせるかが難しい。現状ではどうしても医療志向が強いが、どのようにバランスをとるかが問題である。最近では、「自立支援」がキーワードになってきている。

#### 質疑応答の中から

- 天理教では、厚生省から直接の許可を得てホームヘルパー養成事業を行なっている。
- 高齢者を対象とした医療や福祉関係の講座や講演会が大はやりであるが、高齢者には、すぐ役立つ知識を得たいという実学志向が強い。これは高齢者自身が、心のよりどころをどこに置いたらよいかかわからず、迷っている、その裏返しとしてすぐに役立つような知識に飛びついているのではないだろうか。また、心の支えを持っている人でも、施設内でそれを理解し支える環境がない。そこにこそ宗教者の役割があるのではないか。
- 宗教者が、病院や施設で役割をになっていくということも大切だが、もっと在宅に目を向けるべきではないか。ピラミッド構造の医療の現場にはなかなか入り込めない。しかし、在宅介護に重点を置く方向性を考えると、また、



福祉と宗教者の連携という観点から考えても、在宅への宗教者の支援が求められていると考えるべきであろう。

- 高齢者問題は、実は女性問題でもある。介護する人、介護される人、ともに女性が多い。女性にやさしい福祉を。
- これからは、高齢者が共同で生活するグループホームが必要とされてくる。お寺でもそのような施設、小規模な「宅老所」を考えてはどうか。

## 2、老人保健施設『アウン』

老人保健施設『アウン』は、医療法人大雄会に所属する施設である。医療法人大雄会は、病院（総合大雄会病院、大雄会第一病院）、看護専門学校、医科学研究所、老人保健施設「アウン」、在宅介護支援センター「アウン」、訪問看護ステーション「アウン」等の施設で構成される、私立の医療法人としては有数の規模と内容を誇っている。

私たちは、老人保健施設『アウン』を訪問し、理事長伊藤伸一医師による施設運営理念に関する講話、林妙和施設長補佐による老人保健施設「アウン」の内容説明、及び同施設内にある在宅介護支援センター、訪問看護ステーションの各担当者からの説明を受けた後、施設を見学した。

理事長伊藤伸一医師講話：老人保健施設は、高齢者の入院治療はいかにあるべきかという問題を検討する中から生れてきた。日本の国家予算70兆円に対して医療費は24兆円であり、大きな規模のお金がかかっている。しかも今後高齢化社会が更に進展していくと、肥大化した医療費によって国の経済が破綻するのではないかという（医療費亡国論）不安が生じる。高齢者の場合、病気が治っても生産活動に復帰できるわけではない、機能低下はあっても必ずしも病気とは言えない場合がある、そのような特殊性を持った高齢者の医療に多くの経費を支出することが問題視されるようになった。そこで、高齢者を対象とした、病院と在宅の中間に老人保健施設が設置され、国から1人1か月35万円の補助で

医療、介護すべてをまかなうシステムが作られたのである。

これからの医療はどうあるべきであろうか。いかに、効率的に程よい医療を、国として提供できるかがこれからの課題である。戦後いかにして国民の健康を維持するかの国策として、主として医療の量の増大に力が注がれた。そのために、事業としての医療がもうかるように経済誘導されてきた。その結果として日本の医療制度は世界に冠たるものとして成功を取めてきた。ところが、現状を見ると、アメリカでは人口2億4千万に対してベッド数が90万であるのに対比して、日本では人口1億2千万に対するベッド数160万であり、これはいかにも供給過剰で、社会的入院が多いことを示唆している。65歳以上6か月以上入院しているベッド数が30万を越えると推定され、この分は必ずしも病院での入院が必要ではないものと考えられる。過剰な検査、過剰な薬に対する反省も出てきている。こうした過剰な量の規制が行なわれれば、今後は病院の倒産、閉鎖も珍しくない時代が来る。そして、老人保健施設、ナーシングホーム等の需要が高まって来るであろうが、しかし現状では、そうした施設で医療や介護の質を高めようとすれば経営に負担になるという矛盾も含んでいる。

これまでは、医療の量の問題が主として論議されてきたが、これからは医療の質が問われる時代が来るであろう。質の中身には、1、[ストラクチャー] ハードの面で設備が整っているか、2、[プロセス] 設備をどのように有効に活用しているか、3、[アウトカム] 結果としてどのような成果をもたらしているか、等が含まれるが、現在の日本の医療システムの中にはこのような質を評価する機能がない。アメリカではチェック・マニュアルがあって常に医療の質がチェックされるシステムになっている。この点が日本の医療の今後の課題である。

林妙和施設長補佐：資料に基づいて、「アウン」の現状を詳細に説明を受ける。

在宅介護支援センター、訪問看護ステーションについても、各担当者より説明を受ける。

### 3、法音寺学園『日本福祉大学』

日本福祉大学は、前述学校法人法音寺学園の中心にあり、日本の福祉高等教育の草分け的存在であり、創立40年を超える。社会福祉学部、経済学部、情報社会科学部の3学部を有するが、今回の研修は社会福祉学部の内容に主眼を置いた。副学長である宮田和明教授の「少子・高齢社会とこれからの社会福祉」と題する講義を受け、意見交換の後、キャンパスを視察した。

宮田和明教授講義：講義後の質疑応答より

○高齢者福祉を考える視点として、①元気な高齢者、いわゆる「元気老人」にどのように対応するか、②心身の衰えに対してどのように対応するか、③人生の終末期において、どのような救済がありうるのか、この3点について、それぞれに対応を考えるべきである。

\*福祉予算の負担の問題は、アメリカ型の個人主義的な方向を考えるか、お互いに負担しあいながら相互扶助の方向を考えるかであるが、いずれ今後の負担増はやむをえないであろう。

○施設は、プライバシーを保護した、それまでの生活と連続した生活が可能なもの、という視点から考えるべきであろう。ただ、必ずしも個室化をのぞんでいる人ばかりではない日本人の特性も考慮する必要がある。

## V まとめ

今回の研修の主目的は、ビハーラ講座を開設するに当り、どのような内容にするべきか、受講者にどのような情報を提供すべきかを探ることにあった。そのためには、医療や福祉の現場において、医療や福祉のサービスを受ける人たち、サービスを提供している人たちが、どのような理念に基づいて活動し、現実に現場でどのような思いを抱いているのかを知ることが大切である。そして、教育の場でのカリキュラムには、そうした現状を踏まえて、将来に向かってどうしていけばよいのかという、未来像、将来像、理想像が根底にあるはずであり、それを

探ることも極めて重要な作業であると考えられる。

今回の私たちの研修は、老人保健施設1か所、教育施設2か所の、ごく限られた範囲ではあったが、上記の所期の目的とするところの多くの情報を得ることができた。ことに、各施設での意見交換の中で、私たち宗教者がこの分野においてどのような活動をするのが求められているのかについて、示唆に富む議論がなされたことは、極めて有意義であったと言える。

今回の成果を基礎にして、ビハーラ講座の内容を深めるべく更に検討を加え、法華経者の社会的貢献のあるべき姿を求めていきたい。

以上